

大槌町からの報告

岩手県三陸沿岸は雄大なリアス式海岸と豊かな漁場が有名ですが、手付かずの美しい山々は松茸の産地でもあります。今年は昨年よりも多く松茸が取れたとのことで景気の良い話も聞かれました。そろそろ東北は一足早い冬を迎えようとしています。

今年の秋も子ども達や町民が楽しみにしているお祭りが盛大に行われました。8月の吉里吉里祭り、9月の大槌祭り、10月の赤浜祭り。それぞれの地区で人々が一つになり、無病息災や大漁万作を祈願しました。10月の祭りを終え、「1年が終わったなあ……」としみじみしているのは、私だけではないと思います。

今年度、こどもセンターは昨年より利用人数が増え、毎日40名以上の子ども達が来館し友達と遊んだり、宿題に取り組む等して過ごしています。子どもたちが増え、放課後の居場所としてなくてはならないものになってきているのを感じるとともに、多くの子どもたちを限られたスタッフで見守る難しさも感じます。センターでは今年も定期的に子ども達が喜ぶイベントを開催してきました。夏は沢登り体験やこどもセンターまつり、秋には焼き芋会等と季節行事は保護者の方々からも好評です。

9月には大槌小学校と合同で、「地震、津波を想定した避難訓練」を行い、近くの高台まで避難をしました。津波の訓練という事で、子どもたちも職員も緊張しながら訓練に参加しました。参加した子ども達は「とても疲れた」「地震・津波の訓練となると心臓がバクバク鳴る」等と話していました。

震災から2年と半年が過ぎ、普段は落ち着きを見せている子ども達ですが、些細な事で不穏な様子や暴力的になり、友達とのトラブルが少しずつ多くなってきたように感じます。震災後に避難所、仮設住宅や仮設校舎等ずっと我慢していた気持ちが今になって少しずつ発散されてきたのでしょうか。小学校ではこの先も長くカウンセラー等を配置し子ども達の成長を見守っていきたくとしています。

我々センターの職員も、子ども達が心の中で抱えている問題に配慮しながら、一人一人に寄り添って行く事を必要に思います。



焼き芋会の準備

ガザから届いた絵の前で

ガザの子どもたちの描いた「海」の絵を大槌の子どもたちに届けに行きました。その時に、ガザの様子についても、写真や映像を見せながら少しお話をしました。小学校低学年の子どもたちが多くて集中できるかな、ガザの様子を見ると被災を思い出さないかと心配したのですが、取りこし苦労だったようで、一生懸命話を聞いてくれました。写真を見て「あ、がれきだ」と子どもたちが口々に言います。1年生が「かわいそうだね」と言いに来てくれました。理解力と共感力の豊かな子どもたちです。

新聞によると地価の高騰が全国で最も大きいところが大槌です。市街地の半分以上が浸水したため、住宅地として使える場所が非常に限られているからです。そうした場所に早々と新築の家が建っている一方で、将来設計を考えられない被災者も多く、被災から2年半を過ぎて、ますます復興の難しさを実感となってきています。災害復興住宅も、団地形式や長屋形式がほとんどのため、震災前に比較的広い住宅に住んでいた地元の人たちにとっては、「仮設住宅とあまり変わらない」という思いも強いようです。また、災害復興住宅に入ると自宅を再建するときの支援が無くなるから、今は我慢するという人も多いようでした。仮設住宅の台所は狭く自炊をしなくなった家族も増えたとかで、夕方住宅地に屋台のカレー屋が来ていたのが印象的でした。